

## 論文審査の結果の要旨

### Delayed type of allergic skin reaction to *Candida albicans* in eosinophilic rhinosinusitis cases

好酸球性副鼻腔炎病態におけるカンジダアルビカンス遅延型皮内反応関与について

日本医科大学大学院医学研究科 頭頸部・感覚器科学分野

大学院生 若山 望

*Auris Nasus Larynx* 2017年掲載予定

鼻茸や副鼻腔粘膜への好酸球浸潤を強く認める副鼻腔炎を好酸球性副鼻腔炎(eosinophilic rhinosinusitis : ECRS)と呼ばれている。ECRSは喘息の合併を高頻度に認める難治性易再発性の副鼻腔炎である。難治性易再発性の疾患であり、手術施行後も再発を起しやすく2014年に診断基準(JESREC study)が定まり、2015年より難病指定疾患を受けている疾患である。病態についてはアラキドン酸代謝異常や黄色ブドウ球菌エンテロトキシンのスーパー抗原、真菌の関与の報告があり、これらが免疫系に影響して好酸球性炎症の発症、難治化易再発性病態を引き起こしている可能性が指摘されているが未だ病態は不詳であり、現在病態解明が急務である。本研究では好酸球性副鼻腔炎における病態解明のため手術症例を基に各種採血データ及びアレルギー検査等の臨床データで検討した。対象症例は内視鏡下鼻副鼻腔手術症例のうち、両側性に副鼻腔炎病変を認めた慢性副鼻腔炎症例49症例であった。JESREC studyに基づき好酸球性副鼻腔炎と非好酸球性副鼻腔炎に分類して検討を行った。

本研究では以前の報告と同様に好酸球性副鼻腔炎は非好酸球性副鼻腔炎の両群間で、末梢血好酸球割合は有意に高く、かつ再発率が高かった。しかし、本研究では初めてアレルギー抗原皮内反応検査でカンジダ抗原に対して遅延型皮内反応が好酸球性副鼻腔炎群で有意に高い事が示された。加え、好酸球性副鼻腔炎症例のうち経過が不良な症例でカンジダ遅延型皮内反応陽性率が高い事も示された。このように、好酸球性副鼻腔炎の再発・難治化病態にはカンジダ遅延型皮内反応陽性が関係している事が、本研究により初めて示され臨床的・学術的にきわめて価値あるものと思われる。

第二次審査では、他の真菌ではなくなぜカンジダのみ反応するのかについて、カンジダ遅延型反応陽性と副鼻腔組織への好酸球浸潤の関連について、カンジダの人種差について、他の治療法の可能性について、今後の研究課題及び発展についてなど、それぞれの確かな応答がなされた。